

架空の関係

大村伸一

歯宮死乏と名付けられている。およそ死とは縁のない存在でありながら名前に「死」という文字を含んでいるのは何かの皮肉なのだろうかと思う。「死」がどういうものかは想像するしかないけれどどれだけ想像しようとしても体験に欠けているためだろう何も思い浮かばない。「死」についての無知をあざけるために名前にその文字を使ったということだ。それが皮肉ということか。それが皮肉ということだろうか。それなら「死が乏しい」という意味の「死乏」という名前は、皮肉などではなくまさに歯宮死乏にふさわしい名前だろう。皮肉など存在せず、皮肉だという疑いはただの誤解というわけか。いやだからといって、その名前が皮肉ではないということにはならない。表面的には適切な名前に見えるがそう名付けるときの意図はまた別のものかもしれない。いやいやよく考えれば分かることだが「死が乏しい」というのは正確ではなく歯宮死乏は「死が欠けている」のである。それをことさら「死が乏しい」と言うからには、やはり明らかに皮肉なのである。もしかすると「欠」という文字を間違えて「乏」としてしまったのかもしれない。命名するときにはよくある間違いである。皮肉ではなく単なる誤記というだけのこともかもしれない。本当のところは分からない。そういえば最初には名前などなかったはずだ。歯宮死乏という名前はなかったはずだ。名付けられるということとは名付けられていない頃があったということではないか。名前のない時期があったのである。ただそうだとするとその名づけられていない頃のことは思い出そうとしても思い出せない。名付けられていない頃だけでなく、まさに名付けられたその時のことも覚えていない。それまではなかった名前を得た瞬間に何も記憶がないということがあるのだろうか。だとすれば本当に名付けられたのだろうかという疑いも起きてくる。歯宮死乏と名付けられているのだろうか。

覚えていることは幾つかあり、その中のどれが一番最初の記憶なのかははっきりとしない。覚えている記憶といえば、例えば大勢の見物に囲まれて裸の大男と組み合い戦っていた。そのときは自分の息ばかりが大きく聞こえたものだが、思い返してみると相手の息の方が大きく耳に残っている。記憶の中の腕や背中の痛み具合から想像するとずいぶん長い間全力で組み合っていたようだ。お互いの身体が大量の汗にまみれ、それがすでに冷えかけてもいた。もはや全力で組み合うことはできなくなり、動かしにくくなった身体から熱が失われはじめていたのに違いない。腕に密着する相手の背中や脇腹は冷たくもあり熱くもある。力を緩めれば身体を潜り込ませてくる小兵の相手に、負けるはずはなかったがなかなか決め手が見つからなかった。最強の一人であるからにはどんな相手であれどう対応すればいいかは熟

知していた。勝利は疑いようがなかった。負ける可能性などまったくなかった。そしてその後、勝ったのか負けたのかあるいは勝負がつかなかったのか、それは覚えていない。

覚えていることは他にもあるが、その中のどれが一番最初の記憶なのかははっきりとしない。覚えている記憶といえば、例えば自分が河童であることに気づき頭を手で撫でて皿があるかどうか確かめていた。生まれつき河童だったのか、何かが原因で河童に変化したのかは分からない。わざわざ皿を確かめなくてはならないということは、生まれつき河童であったわけではあるまい。頭を覆う硬い円形の皿に触れるとその指先がしびれ、そのしびれは一日以上消えなかったから、皿に触れてはいけなかったのだろう。河童になってからというもの身体の底、両の脚の交差する付け根のあたりから、絶え間なくあふれてくる性欲を解き放つために数えきれない女と交わったというのに、その誰一人名前を覚えていない。自分が女の名前を覚えていないのと同じように、女も誰一人、歯宮死乏という名前を覚えていないという意味だ。そのことについて感傷的になれないのはやはり河童だからだろう。河童の精液を浴びた女達は河童の子供を宿したのだろうか。それとも、人と河童の間に子供は生まれないのだろうか。あるいはもともと河童であったにもかかわらず、自分ではそれに気づいていなかったという可能性はある。そのことに気づいた時、頭の皿を確かめようとしたのである。いずれにせよ、自分の皿に触れて一昼夜の間指が痺れたあの日以降、河童であり続けたことに変わりはない。

覚えていることは他にもあるが、その中のどれが一番最初の記憶なのかはあいかわらずはっきりとしない。覚えている記憶といえば、例えば客船の甲板からどこかの国の紙幣を海に撒いていた。何ヶ月も航海する大型客船では、乗客はすぐにほとんどが顔見知りになる。歯宮に与えられた客室には大きめのトランク三つに隙間なく詰め込んだ紙幣があり、他の乗客に気づかれないように少しずつポケットにその紙幣を詰め、顔見知りに会わない通路を選んで船尾に向かう。甲板に出ると手すりにもたれ、手許を隠すようにして、風向きをみながら一度に数枚ずつ紙幣を海に捨てる。うまく風に乗れば、船尾の彼方、海を中心といえそうなあたりまで一気に紙幣は飛ばされてゆく。気まぐれな風のせいで高く舞い上がり甲板に戻ってくるお札もあるが、それは仕方が無い。やがてそのような紙幣が何枚も見つけれられ怪しまれれば、海に紙幣を捨ててはならないと船長が宣言し、犯人探しが行われるだろう。それまでにできるだけトランクの中身を減らさなくてはならなかった。

どの記憶も細部がぼんやりとしてはいても、思い出すことはできる。思い出せるけれどこれらの記憶がはたして歯宮死乏の記憶なのかどうかはあやしい。記憶をつなげてみてもそれが一つの人生となるように思えないからだ。河童が相撲取りになりやがて横綱として得た財産を船から海に撒き捨てるというような話があるものだろうか。それとも、他人の金を海にばらまいて、金を奪われた追っ手から逃れるために相撲取りになり、横綱にまで昇り詰めるがついには河童になってしまったなどという話がありうるだろうか。万が一そんな話があつ

たとしても、齒宮死乏はその話とどう関係するのだろうか。記憶だと思っただけはいるが、それが実は真実ではなく、ただの夢だと言われればそうかもしれないと思う。どれか一つくらいは本当の記憶なのかもしれないが、それ以外は夢だったと言われればなおそう信じられるだろう。記憶といってもそれだけのものだ。とはいえ眠っている間の記憶はまったくなく、齒宮死乏にとって「夢」は「死」と同じだった。

減多という名前だったか言真という名前だったか、どちらにしろ同じ顔をしたその男とはよく話をした。喫茶店であったりレストランであったり会う場所は決まっておらず、そういえば彼の部屋を訪れることが多かった。林の中であったか、断崖の真下であったか、あるいは深海の底に建てられたのであったか、彼の小屋は日当たりが悪く、いつも涼しくいつも薄暗く、そのせいなのだろうか彼の顔をはっきりと見た事は一度もない。彼は世界中を旅してきて、その旅の終わった今、その思い出を語るのだという。それとも旅はまだ終わっていないと言っていたのだろうか。ある国では、盗賊と間違えられ逮捕されたという。身体を荒縄でぐるぐると縛り上げられ、指さえ動かさなくされてから冷たい牢獄の石の床の上に打ち捨てられた。床からは尿のにおいがした。何千人何万人もの罪人のこぼした尿のにおいは泣きたくなるほど強烈で、身体を縛り上げられていてはそのにおいから顔をそむけることもできなかった。もしも泣いたとすれば目からあふれ落ちるのは涙ではなく誰のものとも知れない尿以外にありえないと確信できた。牢屋には先客が一人いて、それがなかなかの美しい青年だということは、夜になり格子のはまった高い窓から射し込む青白い月の光で分かった。青年は呼びかけても何も応えず、じっとしているだけだった。やがて真夜中になると青年は黙ったまま立ち上がった。月光を浴びながらしばらく佇むと、身体をぶるっと震わせるだけで身体に巻き付けられていた縄がすべてほどけ落ちた。脱獄するのだと気づいた減多はあわてて自分も連れて行ってくれと頼んだが、青年はあざけるような微笑みを浮かべただけで彼に一瞥を与えることもなく、窓の鉄格子に手をかけ、その狭い隙間に頭を押し込んだ。人が通り抜けられるはずのないその格子の間を青年はこともなげに通り抜け、牢の外に出て聞いた事のない言葉を一言二言声に出すと、そのままどこかに消えてしまった。脱獄に気づいた看守達が、七度調べたところでは、格子窓の周辺には青年の持ち物は何一つなく(格子の手前に脱ぎ捨てられていた青年の衣服や所持品はすべて看守たちが着服したのだ)、ただ、格子や壁には輝く鱗が残されていて、それであればへびの化身だったのだろうということになった。

減多の姿さえはっきりと思い出せないのに、彼の話したことはこのようによく覚えている。覚えているからといって何の役にも立たない記憶だが、明瞭に思い出せる。ただ、どれだけ思い出せたとしても、それが真実であるという気がしない。嘘をついているというわけではないが、かといってそれが現実にあったことだとも思えない。確かなことは、今こうして思い出しているということだけだ。どれだけはっきりとした記憶であっても、それは勿論現実とは異なる。

減多ではなく言真だったかもしれないその男はセールスマンであり、商売の秘訣を教えると言っては、自分のうまくいったビジネスの話を聞かせてくれた。自分のことを話すのが好きなのだということは、その話し振りから分かった。彼の扱う商品は心臓に取り付ける装置だったり、一人用の気球だったり、時には言葉だったりした。彼曰く、心臓に取り付ける装置といっても心臓の欠陥を補うようなものではなく、命を奪う可能性のほうが高いのだけれど、それを知らない町中のみんなは先を争って買ったものだ。一人用の気球といっても、空を飛べるわけではなく、ある時などは世界中から訪れた何千という人間が揃って気球で空中に昇り、時間を測ったかのように揃って気球が破裂して、空中から滑走路に一直線に墜落し地面に当たるとその衝撃で身体が風船のように膨れ、そして弾けてしまうのを見ていたものだ。言葉といっても、誰にも通じる言葉ではなく、それでいて一度使い始めれば死ぬまでその言葉を使わずにいらなくなる。実のところ、その言葉を使うから死んでしまうのだったかもしれない。これは企業秘密というものだ。という。

言真の顔立ちや服装(おそらく灰色のスーツ姿だったはずだ)さえ思い出せないのに、彼の話したことはこのように何もかも一つ残らず正確に思い出せる。ただ、思い出せはしてもそれが真実であるという気がしない。嘘をついているというわけではないのだが、かといって彼の話が現実にあったことだとも思えない。確かなことは、自分の言葉が少しも確かに思えないということだけだ。

歯宮死乏の言葉はどれも真実であり、それとともに言葉にしていないこともまた真実である。言葉にしていない真実について歯宮死乏は何を知っているのか。知らないが故に言葉にできないこともあるのだろうが、知っていても言葉にできないことも存在する。そもそも知っているか知らないかをどうやって確かめるというのだろう。勿論、それは確かめようがなく、つまり、知っているかどうかという基準は何の役にも立たないということだ。確実なことは、言葉にしたことだけであり、それ以外については誰にも分からない。

言葉しか存在しない世界にいた記憶がある。歯宮死乏が歯宮死乏と名付けられる以前のことだ。歯宮死乏と名付けられる以前のそれが果たして歯宮死乏と同じ存在なのだと言えるかどうかは分からない。おそらく違うのだろう。それでも、その頃のことは記憶にあって、それ故にそれはまた歯宮死乏の記憶であると考えられる。もしかすると、名付けられた後にも幾度かその世界にいたことがあるのかもしれない。言葉しか存在しない世界というものはどこにでも存在しているのだし、言葉の存在しない場所は言葉というものの定義によって存在しえないのだから、記憶にないほうがおかしな話だ。だとすれば、その記憶をただ歯宮死乏の記憶であると錯覚しているだけなのだろう。言葉しか存在しない世界ではすべてのことが真実である。ただ、真実になるためにはそれは言葉でなくてはならないのだが、どんな言葉も最初は言葉ではない。例えばそこに特別な意味などあるはずのない染みであるとか、機械の故障による実在しない模様であるとか、精神の異常によって知覚できるあらゆる雑音や汚

れといったものは、注意を注ぎ観察を続けているとやがて意味を表すようになる。その意味は、意味を持たなかったときのその染みの形や色合いとは全く似たところがなく、同じ場所の同じ形の汚れであっても違う意味を生み出すことも多い。いや同じ意味を生み出すことなどあり得ない。歯宮死乏はその真実に気づいたとき、その真実をずっと以前から知っていた。忘れていたという訳ではなく、知っていたのは確かだが、その瞬間までまるでその知識が存在しなかったかのように感じたという意味である。それからというもの、歯宮死乏は自分はいくらも知っているのだけれど、そうとなった後にだけそれを知っていたことに気づくのだと分かった。そうであるが故にその染みが言葉というものだという事を知ったのはずいぶん後になってからだ。そうと気づいてみると世界はすべて言葉でできていて、言葉でないものを探そうが難しい。困難だというよりも不可能だ。そして、歯宮死乏はこれらすべてが言葉しか存在しない世界の記憶であることに気づいた。

言葉だらけの記憶というものは何か作り物めいた雰囲気がある。言葉というものがそもそも作り物なのだから当然だとも思えるが、それを差し引いても言葉があふれている。いったいこれはどうしたことなのだろうと思ひよく観察すれば、歯宮死乏の目の前には無数の新聞紙が上下左右に満遍なく敷き詰められている。正しくは上下左右ではなく前後左右であるのかもしれないし、東西南北かもしれない。四つの文字のそれぞれが指し示す方向に文字はどこまでも並んでいる。文字ではなく新聞紙がそれぞれの方向に並べられていると言うべきだろう。新聞紙と新聞紙の境界はぼやけ、すべての新聞紙が一つにつながっていて、その巨大な新聞紙が世界を覆っているようにも見える。世界が新聞紙なのではなく、世界が新聞紙に包まれた何かである。その世界を包むものをよく観察すると、新聞紙に印刷された文字は小さく、気をつけなければその一つ一つの文字に違いがあるなど信じがたい妄想であるかのように思える。すべての文字が同じ文字であるのかそうではないのかは判然としないが、それというのもその文字がどれもまるで読まれることを拒んでいるかのように文字として読めないからだ。なるほど文字が何かを指し示すために作られたものであるならば、何を指し示しているのかが明らかになった瞬間に文字はその目的を達してしまい、おそらく文字ではない何かに変わり読めなくなるのかもしれない。文字が文字であり続けるためには、読まれることを拒み何を指し示しているのかを悟られないようにしなくてはならない。そうすればその文字は永遠に文字でいつづけることができるだろう。それでも読まれない限り、それは文字とは言えないのではないだろうか。なるほどなるほど、文字であり続けることと、文字でなくなることは同じことだというわけか。歯宮死乏は目をこらして文字を見極めようとする。すると文字は視線を避け、視界の周辺に逃れて行く。読み取ることができないように、かすかに揺れてさえている。そんなにまでして文字でいたくないのであれば、あるいはそんなにまでして文字でいたいのであれば、文字などあってもなくても構わないと歯宮死乏は目の前にあふれている文字のようなものから目をそらす。そもそもこれは新聞紙なのか。遙か彼方

まで癒着し境目を失った、元は新聞紙であったかもしれないそれは、題字も発行社名もページ番号すら見える範囲には存在しない。新聞紙が新聞紙である理由が題字や発行社名や頁番号などではなくそこにニュースが書かれていることだとしてもこの新聞には読むことのできる文字がないのだから勿論ニュースも見当たらない。だとすればこれを新聞紙と呼ぶわけにはいかないはずだ。新聞紙に似た何か別のものが文字のようでもある何か別のものとともに世界を覆っているということなのだろう。

そのとき歯宮死乏は文字であった。いつから文字だったのか、その後いつ文字でなくなったのかあるいは今も文字なのかは確かめようが無い。歯宮死乏が生まれながら知っているように文字の観察する世界には文字は存在しない。自分自身を観察するような文字がどこに存在するだろうか。世界を包むための新聞紙のようなものは新聞紙などではなかった。そこに見え隠れしている文字のようなものは文字ではなかった。歯宮死乏は文字の存在しない世界にいた。歯宮死乏の他にもその世界に文字はいたのかもしれない。いたはずだが、他に文字のいた記憶は確かになかった。おそらく、新聞紙のようなものの表面には皺があり、それを文字と見間違えていたのだろう。皺にはこれといった規則性はなく、海のさざ波とはまさにこのようなものだろうと思った。世界を覆う海のさざ波は何のために存在しているのだろうか。そもそも、海のさざ波というものは単なる比喻としてではなく実体として存在しているのだろうか。そもそも海のさざ波が存在し、海のさざ波が世界を覆うものであるのなら、歯宮死乏は海のさざ波から生じたのだろう。あらゆる存在は海のさざ波から生じるからである。それにしても、海とは何なのだろう。海がどのような存在であるのか、海がこのように新聞紙のようなものの表面の皺のような存在であると断言してよいのであろうか。歯宮死乏はこのように要約した。

「それにしてもこんなことがありうるものだろうか。記憶と言われれば記憶だと信じ、幻覚と言われれば幻覚ではないとは言えない。力士であつたり河童であつたり紙幣であつたりした記憶は記憶だと言えるだろうか。顔も思い出せない誰かへのインタビューをどことも思い出せない場所でいったい何のためにしていたというのだろうか。まして他でもない文字であつたことの記憶を持つなど、そんなことがありうるものだろうか。そもそも文字が記憶を持ちうるものだろうか。ただのねじくれた線でしかない文字が生き物のように記憶を持つということについて、疑いを抱くだろう。まして、海のさざ波とは」

歯宮死乏と名付けられていた。しかし、それを歯宮死乏と呼ぶことは一度もない。おそらくそれは歯宮死乏ではなかったからである。歯宮死乏と名付けられてはいない。